



フ ラ テ

医学部長・学友会会長 本 間 研 一



北海道大学医学部フラテ編集部が年に1回、雑誌「フラテ」を刊行している。日本の各地に「〇〇フラテ会」なるものがある。また、最近設置された医学研究科連携研究センターに「フラテ」のニックネームが付けられている。昨年9月に、「北海道大学医学部フラテ祭2007」が開催された。「フラテ」とは何かと、多くの人に聞かれる。今回、「フラテ」について、その由来について述べてみたい。

まず雑誌フラテについて。大正14年6月15日に「フラテ」創刊号が発行されている。発行所は北海道帝国大学医学部学友会、編集者は武田勝男氏（名誉教授）である。雑誌フラテは、昭和16年5月の第40号を最終号として廃刊された。雑誌刊行と廃刊の経緯について、「北大医学部50年史」は次のように述べている。「アショフ教授（ルドウィッヒ・アショフ）はドイツのフライブルグ大学で病理学を講ずる世界的に高名な教授であって、北大中央講堂でドイツの学生生活に関する興味ある講演をおこない（1924年（大正13年）の8月）、医学部学生に多大の感銘をあたえた。その結果、医学部にフラテ運動がもち上がったのである。」（117頁）。また、武田勝男氏が学友会雑誌の名称「フラテ」の由来について、開学十周年記念号（フラテ第21号）で述べている。「アショフ博士にStudentenbundの意気を吹きこまれ、今教授（今裕名誉教授、元北大総長）にFraternityの解説を受けたときである。「フラテ」、（中略）イタリア語の同胞を意味する字であった。（中略）雑誌フラテはかくして創刊された。」。現在の雑誌フラテの表紙裏に今氏の銘として、「フラテは兄弟である。兄弟の情を以て交わる大学生の団体である。博愛友愛と云うよりはもっと強い意義を有するのである。」が記載されている。昭和16年、戦時下にあって医学部学友会は解散させられ、同時に雑誌フラテの刊行も中止された。敗戦後の1956年（昭和31年）雑誌フラテは第41号から復刊し（北大医学部50年史、228頁）、現在に至っている。

この様に「フラテ」は北大医学部学友会が発行する雑誌の名称であった。武田勝男氏によると、「やがて、今教授の手によってフラテの“モノグラム”が創定され、“フラテの旗”が同一の意匠の下に造られて今教授から寄贈され、」（手稲のあけくれ・武田勝男著）とあり、フラテ旗が作成されたことが伺える。このモノグラムは伝わっていないが、その象形は学友会から卒業生に贈られるフラテバッジ、最近ネクタイピンやスカーフ止めのアクセサリーに反映されている。ちなみにフラテのマークは、濃紺の地に赤い楕が置かれており、FRATEの5文字と、黄色い北斗七星、北極星が散りばめられている。

一方、日本各地に散らばった北大医学部の卒業生は、同窓会とは別に、地域単位の親睦組織、フラテ会を設立し、定期的に会合をもち親交を深めている。親子、または孫ほど歳の離れた卒業生が、あるいは何らかの身分で北大医学部に籍を置いたものが、共通の思い出として北大医学部を語るとき、「フラテ」の精神が蘇る。雑誌フラテには、毎号「フラテ各地に行く」が掲載されており、北大医学部卒業生の活躍を伝えている。今回、90周年記念事業への協力依頼を兼ねて、幾つかのフラテ会に出席させていただき、北大医学部の近況を報告するとともに、新しく制定された「フラテ旗」（図1）を贈呈している。フラテ会は自然発生的な会なので、特に本部はない。



図1 「フラテ旗」

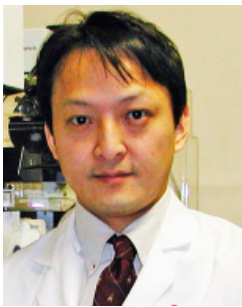
平成19年9月、北海道大学医学部フラテ祭2007が開催された。フラテ祭は、医学部卒業生や医療関係者、学生やその父母、現職教員が一堂に会し、北海道大学、北大医学部の現状をつぶさに見ていただき、医学部の過去、現在、未来を語る会で、毎年1回夏に開催されることになっている。第1回であった昨年のフラテ祭では、本間研究科長（医学部長）、浅香北大病院長、長瀬北海道医師会長の講演会、北海道病院、医学研究科、北大北キャンパスなどを巡るキャンパスツアー、そして祭りの要素を取り入れたフラテ交歓会がおこなわれた。今年のフラテ祭は9月14日（日）に予定されており、全国の卒業生、学生父母に案内を差し上げた。現役の教員、学生諸君の

積極的な参加を歓迎する。

最後に私事で恐縮だが、私は、フラテ運動を触発したとされる病理学者ルドウィッヒ・アショフ教授の子息であり、世界的に高名な生理学者であるユルゲン・アショフ教授の研究所に留学した。その後、ユルゲン・アショフ教授の提案と協力を得て、1984年から2003年までの20年間、国際シンポジウム「生物リズムに関する札幌シンポジウム」（第1回～第10回）を北大で開催した。ユルゲン・アショフ教授は若者を鼓舞するのが上手で、教授と話しているとついその気にさせられる。ご尊父の血を引かれたと思われる。

教授就任挨拶「トランスレーショナル・パソロジーを目指して」

腫瘍病理学分野 教授 田 中 伸 哉



この度5月16日付けをもちまして、医学研究科病理学講座教授を拝命し、腫瘍病理学分野を担当させていただくこととなりましたので医学部関係者の皆様方にご挨拶申し上げます。私は昭和39年、札幌に生まれました。出身高校は札幌北です。学生時代の前半はサッカー部に所属し、後半は基礎スキーに打ち込みました。卒業後は長嶋和郎教授の主宰される病理学第2講座の博士課程に進み、はじめの1年間は、剖検、外科病理診断に専心しました。臨床病理学を通じて多くの癌患者さんに接することで、治療を目指した癌研究に携わりたいと考えて、長嶋教授の計らいで国立予防衛生研究所病理部（倉田毅部長・後に国立感染研所長）の松田道行先生（東大医58年卒・現京大医学部病理学教授）の下へ国内留学させていただきました。

松田先生には科学的なものの考え方、実験のデザイン、癌遺伝子研究の基礎技術など、様々なことを直接ご指導いただきました。倉田部長には、医学研究に取り組む姿勢について熱意あふれるご指導をいただきました。研究の過程で東大農学部教授福井泰久先生、国立精神神経センターの中村俊先生、服部成介先生らにも直接実験のご指導をいただき、目黒、本郷、小平と、東京中を細胞と実験道具を持ってかけ回っていました。また毎週、白金台の東大医科研制癌研究部（山本雅教授）の勉強会に参加させていただいており、総勢30名を超える日本のトップラボのジャーナルクラブではじめて発表させてい

ただいた時の緊張感は今でも忘れることはできません。当時は全ての事が無我夢中でしたが、今思い起こせばとても恵まれた研究環境であり、その中で、自らを支えていたのは、北大医学部で教育していただいた、知力・体力・根性だったと思います。

大学院の後半は2病理に戻り、遺伝子ライブラリーのスクリーニングに取り組み、新規分子を2つ発見しました。この仕事で「チロシンキナーゼ/アダプター分子/グアニンヌクレオチド交換因子/低分子量G蛋白質」というシグナル伝達のメインストリームを証明するに至った訳ですが、当時この経路の解明はhot topicで、ワインバーグ博士（MIT）、バルチモア博士（ロックフェラー大学）、ポーソン博士（トロント大）など世界の一流の巨大研究室がしのぎを削っていました。一方こちらは、松田先生と2人だけ。松田先生がライブラリーを手配し北大に集中させ、到着するやいなや毎日1人でスクリーニング、とれた遺伝子はまとめて予研に送り自動シーケンサー（当時北海道になかったため）で配列解読、データをパソ通（パソコン通信）で返信してもらい、2病から国立遺伝研のデータベースにパソ通でアクセスして遺伝子解析、という流れを組み立てて対抗しました。約半年間の突貫工事のような仕事の末93年の2月の教室スキー旅行の朝、取り急ぎ遺伝研から到着したデータを印刷して列車に乗り込み、新規遺伝子であることを確認して、到着したニセコの旅館から公衆電話で松田先生に報告した日の感動は、ニセコの澄んだ空気、すがすがしい青空、真っ白な雪とともに今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。初めて発見した遺伝子であっても、その名が必ずしも残るとは限りませんが、我々が命名したC3G、

Dock180という2つの分子は運良く今でもこの名で呼ばれています。その後、ロックフェラー大学花房秀三郎教授（'82年ラスカー賞、'95年文化勲章受賞）の下へ留学し、癌遺伝子研究のパイオニアである花房先生の完成された医学研究者の姿を学ばせていただきました。ニューヨークの摩天楼を見下ろしながら、研究に没頭した3年間の日々は今でも最高の思い出です。

帰国後は、また2病理に戻り、病理専門医、細胞診専門医の資格を取得し、特に、神経病理学、脳腫瘍病理学の分野で臨床病理学の研鑽を積みました。研究面では、それまでの基礎研究の成果と技術を背景に、研究成果をいち早く臨床へフィードバックする立場、すなわちトランスレーショナル・パソロジー（橋渡し病理学、探索病理学）を目指して研究に取り組みました。外科病理診断・剖検症例、一例一例を大切に、そこから問題点を探りだし、新しい病理診断技術の開発、新規治療薬の開発を目指すものです。現在も多くの臨床の先生方にsuggestionいただきながら、様々な角度からトランスレーショナルな成果をあげるべく研究に取り組んでいます。

学生教育に関しては、大学院生には、単にインパクトファクターの高い雑誌に論文を掲載することだけを目指すのではなく、研究過程において、自らが設定した問題を自らの力で解決し、自然の真理を解明することの喜び、自分の科学研究を推進する力に対する自信（self confidence）を持つことができるような指導を心がけて

います。その学生がポスドク、ラボヘッドになって開花する力をつけてほしいと願っています。医学部学生については、医師としての人間形成が最も大切なことの1つだと思います。大学病院として質の高い医療を提供するとともに、医学研究科として新しい成果を発信していくことが求められていますが、高度な技術を扱えばこそ、その根底には患者さん一人一人を思いやる気持ちがなければならないと思います。この事は、医学部入部式の時に、当時の教務主任であった松本修三教授が、ご自身が学生時代に内科学の中川諭教授から学んだ精神として我々66期生に訓示されたことであり、以来折に触れて心の中で反芻してきたことです。今まで約15年間学生教育に携わってきましたが、系統講義でもなるべく個々の剖検症例を提示するようにしています。また、顕微鏡実習では、学生一人一人とできる限り対話をし、一枚の病理標本の背景にある患者さんの苦悩と、最先端の医療技術を用いた臨床家が家族と一丸となって病気に立ち向かう姿など、病理医としての経験に基づいた学生教育を行ってまいりました。今後も、単に病理診断名の暗記ではなく、病の方々の気持ちを含めて、統合的に病気を理解することができるように努めていきたいと考えています。

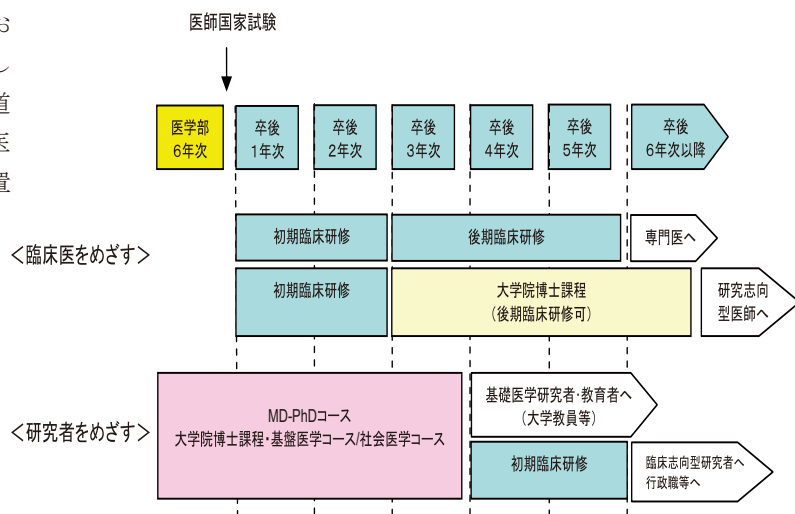
以上、少々長い自己紹介となり恐縮ですが、北大医学部から新しい研究成果を発信し、世界に通用する医学研究者・医師を育成する一翼を担うことができるよう全力で職務に当たる所存ですので、今後ともご指導・ご鞭撻、どうぞ宜しくお願い致します。

北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科MD-PhDコース設置について

副研究科長 吉岡 充弘

医学研究の将来を担う基礎医学分野における若手研究者を育成することを目的として北海道大学大学院医学研究科及び北海道大学医学部医学科に、北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科MD-PhDコースを置くことにいたしました。

本コースの概略は右図のとおりです。



MD-PhDコースの骨子は以下の通りです。

1 選抜方法

医学科5年次を対象に選抜試験を実施します。募集定員は原則として5名以内とします。

2 学部における教育内容

MD-PhDコースは、医学科6年次から開始し、医学科6年次学生と同じカリキュラムを履修するほか、大学院博士課程必修科目（共通コア科目8単位）を履修することができます。なお、医学科6年次授業科目「選択実習Ⅰ及びⅡ」については、指導教員が指定した講義題目を、博士課程を踏まえた研究指導により、履修することになります。

3 医学科卒業時に医師国家試験の受験資格が与えられます。

4 大学院博士課程入試

医学科6年次にMD-PhDコース学生対象の特別選抜として実施します。

5 大学院博士課程入学後の教育内容

MD-PhDコース学生は、選択必修科目にあつて、基盤医学コース群又は社会医学コース群に開講する授業

科目を選択するものとし、博士課程3年次の短縮修了を推奨します。

6 奨学金

MD-PhDコース学生には、大学院博士課程の入試検定料、入学科及び1年次から3年次までの計3年間（36ヶ月）授業料相当分の奨学金を給付します。原則として、この奨学金は返還の必要はありません。

7 学位取得後

1) MD-PhDコース学生には、博士の学位取得後、厳正な審査の上、医学研究科助教採用に関し、優先権が与えられます。

2) MD-PhDコース学生が、博士の学位取得後直ちに卒後臨床研修に進むことを妨げません。

8 実施時期

平成21年4月に医学科6年次となる者から適用します。平成20年の選抜試験（5年次）は平成20年9月3日に実施します。

疑問・質問については医学研究科大学院教務担当（電話 011-706-5018）までお問い合わせください。

第5回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムの報告

核医学分野 教授 玉 木 長 良

2008年5月30日に第5回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムが開催されましたので、ここに紹介をさせていただきます。

未来創薬・医療イノベーションとは、平成18年から開始された先端融合領域イノベーション創出拠点形成の一つで、北海道大学では先端生命科学研究院と塩野義製薬との間で進められている未来創薬と、医学研究科と日立製作所との間で進められている分子イメージングとその応用の2つの研究を融合した大型研究プロジェクトです。この拠点形成は10年間で予定しており、順調にいけば企業と国からの支援をあわせて100億円規模の超大型研究費を集め、研究拠点の整備と産業の育成に寄与することになります。この融合研究を推進するとともに最先端の研究者や政府の方々との交流を深めるため、年に2回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムを開催しています。今回のシンポジウムはすでに第5回目となります。

シンポジウムに先立ち、北海道大学北キャンパス内に設置されたシオノギ創薬イノベーションセンターの竣工式が開かれました。このセンターは4階建てで総面積は2,700㎡に上ります。また2階を通して次世代ポストゲノム研究棟や創成科学研究棟とつながっています。セン

ター内にはシオノギの研究者約20名が配属され、先端生命科学研究院の研究者と共同で創薬の研究を推進するものです。センター内は創薬についての研究体制がすでに構築されており、今後学内の創薬研究者を交えた先駆的な研究体制ができることが予想されます。竣工式には高橋北海道知事をはじめ道内の主な方々が列席され、北海道大学からは佐伯総長、岡田副学長、嶋貫事務局長らが参列され、盛大な式典となりました。医学研究科からも本間研究科長をはじめ私達数名が参加しました。

第5回シンポジウムは先端生命科学研究院の企画で、この真新しいシオノギ創薬イノベーションセンターの1階コミュニティーホールで開催されました。会場には100名定員の会場をはるかに超える参加者があり、熱気に包まれた会になりました。

プログラムを図1に示します。まず北海道大学を代表して岡田尚武副学長が挨拶をされ、その後次世代ポストゲノム研究センター長の五十嵐靖之先生、塩野義製薬株式会社手代木社長のあいさつに続き、文部科学省審議官の藤木完治様が来賓から来賓のあいさつをいただきました。藤木審議官は「革新的医療の創出に向けて」と題して、橋渡し研究、iPS細胞などを用いた再生医療、発展途上国



図1：第5回未来創業・医療イノベーションシンポジウムのポスター。(このポスターの図はシノノギ創薬イノベーションセンター)

を対象とした感染対策の必要性を話され、最後にこれからスタートするスーパー特区についても紹介されました。

基調講演では3名の方からご講演をいただきました。まず米国Burnham InstituteのProf. Minoru Fukudaは腫瘍統御因子としての細胞表面の糖蛋白についての御講演をされました。ついで本間研一医学研究科長が「脳研究のイノベーション」と題した講演をされ、脳神経の時間生理的機能について長年の研究成果を披露されました(図

2)。特に最近では発光技術の導入により、研究の飛躍的な発展がみられたことを強調されました。本間研究科長からはこれまで管理運営についてのご意見は何度もうかがったことはありますが、ご自身の研究成果を伺ったのは初めての人も多く、最先端の脳科学に大いに刺激を受けた講演でした。最後に科学技術振興機構研究開発戦略センター首席フェローの井村裕夫先生に生命科学の新しい動向とわが国の課題と題した講演をいただきました。講演の中で今後の日本が進むべき研究の展開とそれを取り巻く種々の課題について分かりやすく解説されました。このシンポジウムでは我が国の生命科学の研究を決める政策担当のトップの方々から示唆に富む講演をいただいたこと、また米国や北海道大学内の最先端研究の紹介があったことで、大いに刺激を受けたシンポジウムとなりました。またその後は同じ会場でレセプションもあり、交流を深めることもできました。

なお第6回は医学研究科主催で2009年3月13-14日に学術交流会館で開催予定です。ぜひ多くの方々にご参加いただけることを願っています。



図2：シンポジウムで講演される本間研一医学研究科長

中研究棟耐震改修工事

医学研究科長 本間 研一

医学研究科中研究棟の耐震改修工事が平成19年度の補正予算で実施され、来年3月に竣工予定である。中研究棟は、医学研究科の一連の耐震改修工事のなかで最後に残った研究棟であり、これが整備されることで研究棟の改修はすべて終了する。中研究棟には、現在、生理学講座の2分野、病理学講座の2分野、微生物学講座の1分野、予防医学講座の3分野、そして社会医療管理学講座の1分野が入っているが、改修後は、これらに加えて、遺伝子病制御研究所の5分野が占めていた跡地に、社会医療管理学講座の2分野、神経科学分野、救急医学分野、小児外科学分野が北大病院管理棟や旧看護宿舎などから移動する予定である。

中研究棟耐震改修の特徴を述べてみよう。中研究棟は医学研究科研究棟群の中央に位置し、各研究棟を結ぶ十

字路となっていること、また、車いすの通路となっていることから、廊下幅を若干広めにとった。階段位置を現在のホール中央から壁脇にずらすことにより、スペースの有効利用を図った(トイレの拡張、物品保管庫の設置等)。また、中研究棟の改修では、これまでの改修工事の教訓を生かしている。たとえば、建物の外側に耐震壁を設置することで、使用面積の縮小を最小限に抑えた。実験室のレイアウトを分野単位でなく、講座単位で工夫し、共同利用などで実験室の使用効率を高めた。従って、部屋の配置は講座単位となり、さらに既設の東南棟や東北棟の関連分野との連携も考慮に入れた。また、若手研究者や学生の居室を確保し、実験室と切り離れた。さらに、共用スペースとして、大、中、小の各種セミナー室を1階おきに配置している。なお、管理棟側のエレ

ベータは、現在よりも大型の業務用となる。

中研究棟の改修後の講座別配置は図1の通りである。従来、3階にあった生理学講座の2分野が5階に、5階にあった予防医学講座が3階に移った。これは、動物飼育施設をもつ生理学講座の特殊性によるものである。また、社会医療管理学講座が2階～4階に、神経内科学分野、小児外科学分野が1階に、そして救急医学分野は一部3階、一部は東南棟2階に収まる。病理学講座と微生物学講座は以前と同じ階である。つまり、研究棟の上階から、生理系、病理系、社会医学系、臨床系となる。

改修期間中の移転先は、医歯学総合研究棟、動物実験施設、管理棟2階、東北棟、北棟のオープンラボ等を

活用する。数年前からの移転計画なので、比較的スムーズに経過している。一時中断され、後に回されそうになった東北研究棟の耐震改修を、自力で実施したこと、当初の改修計画では中研究棟の後で北棟改修を先にしたこと、医歯学総合研究棟に移転用スペースを確保しておいたことなどが功を奏し、医学研究科の平成の耐震改修工事は大きな混乱もなく終了しそうである。残るは、管理棟、図書館、動物実験施設の耐震改修であるが、管理棟の新築は医学部創立90周年事業の目玉として実施される予定であり、図書館や動物実験施設も2～3年の内には実施される見込みである。

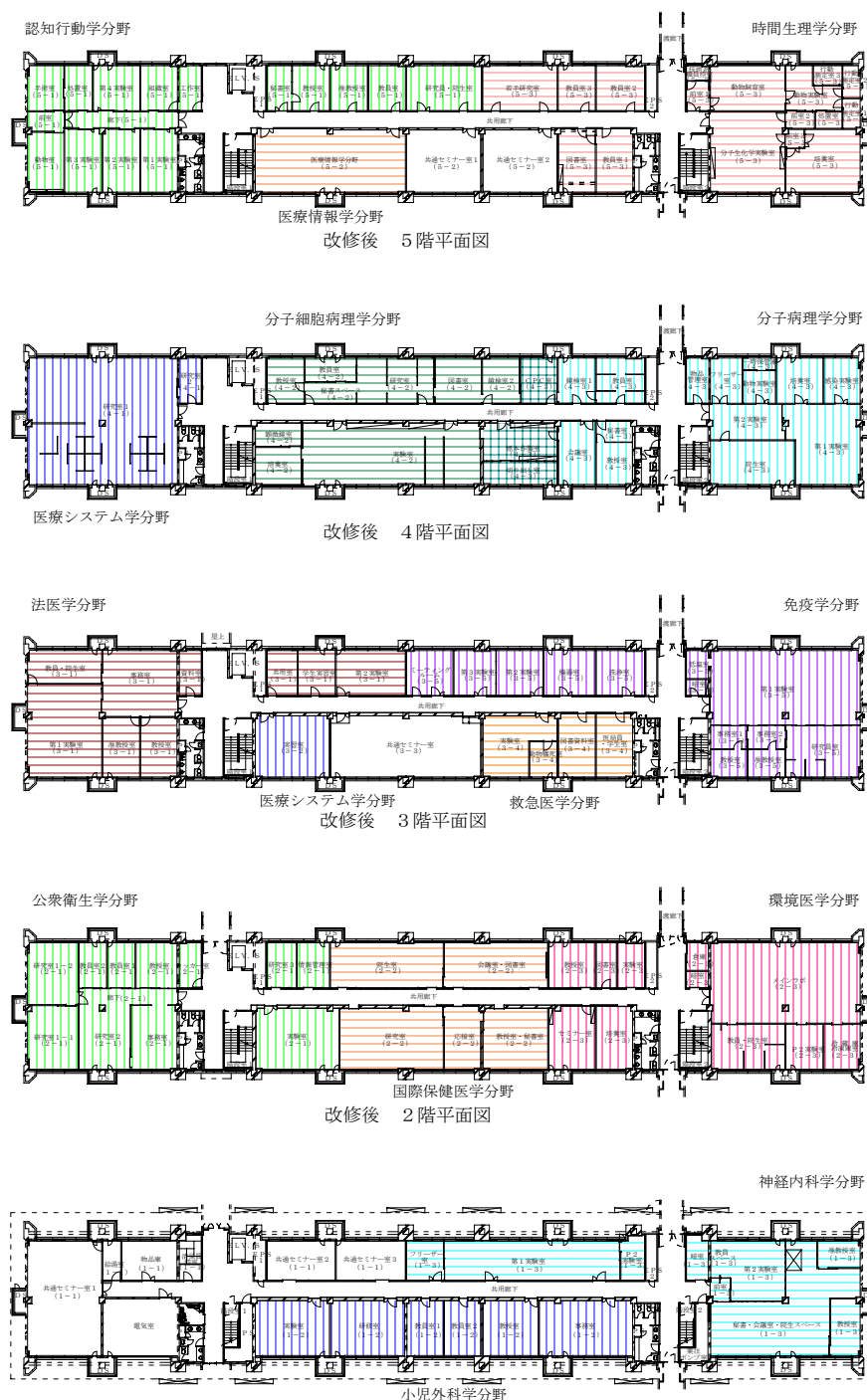


図1 中研究棟平面図

平成20年度 医学科新入生合宿研修

医化学分野 教授 畠 山 鎮 次

平成20年度の医学科新入生合宿研修が、4月12日～13日の2日間大滝セミナーハウスにおいて実施されました。

4月12日午前に医学部玄関前に集合し、美笛峠経由で大滝セミナーハウスに向かいました。新入生95名、2年次学生9名、教員7名、事務職員3名の計114名の参加者でした。到着後すぐに、秋田弘俊教授（22組担任）の司会のもと、教員の紹介がなされました。そしてまずは、本間研一医学部長から挨拶と講話がありました。特に講話の内容として、有史以前からの北海道に住んでいた人々の生活や、北海道大学の歴史が語られ、北海道という特異的地理条件における興味深い側面を道外（道内も）の学生にも教育できたのではないかと思います。その後、野々村克也教授から医学部における6年間のカリキュラムが「ジェンダー」というキーワードのもとで説明がなされました。さらに、吉岡充弘教授から今後約1年半に渡って経験する「全学教育」の履修に関する説明がなされました。

夕食後、渡邊雅彦教授が「医学研究実習」のガイダンスと、「アルコールの正しい飲み方」の講演をなされました。そして、新入生各人がアルコールに耐性であるか否かを自ら知るために、「パッチテスト」が行われました。これが、医学部入学後の初めての実習（実験）であるの

で、新入生は興味深くこのテストを行っておりました。

午後7時から、上級生が合流し、課外活動の説明や勧誘活動で、夜のひと時が進んでいきました。午後10時には上級生は帰宅しましたが、夜通し新入生は語り合っていたようです。深夜にはリーダーシップをとる学生が現れ、率先して後片付けや掃除を協力して行い、朝には整理整頓が徹底されておりました。

13日の朝食後、「共用試験及び臨床実習」に関して、前沢政次教授と小華和柊志准教授から説明がありました。その後、佐藤松治先生（広報室）から、「医師の守秘義務とコンピュータ利用」に関する講演があり、現代社会における医師として必要とされる法律の知識の説明がなされました。その後、21組担任である畠山鎮次教授から、「安全衛生と学生生活」についての講義がなされました。この3つのセミナー中は、前夜の寝不足がたたっているのか、想像通りの風景になっておりました。そして、11時過ぎには大滝セミナーハウスを出発し、洞爺パークホテルで昼食をとり、北大に向かいました。今回の経験は、医学部での初めての共同生活（研修）でしたので、新入生は緊張したところもあったかもしれませんが、しかし、今後のための濃密な研修でしたので、この研修で学んだことはこれからの学生生活に十二分に生かされることでしょう。



野々村克也教授からのカリキュラム説明風景



夕食後の語らう新入生たち

連携研究センター『フラテ』医学物理学部門 (病院・分子追跡放射線医療寄附研究部門)

准教授 石川 正 純



平成20年4月1日から、連携研究センター「フラテ」内に新しく医学物理学部門が設立され、准教授として着任いたしました。医学物理士が臨床現場において治療に関わるとともに、高度な治療技術の開発を目指して研究活動を行っています。全国の国公立大学に先駆けて、医

学研究科内に医学物理学部門が立ち上げられたことは、大変名誉であるとともに、本部門の活躍次第では、これからの医学物理学分野を左右しかねないというプレッシャーも感じております。

臨床では、主に強度変調放射線治療 (IMRT; Intensity Modulated Radiation Therapy) の治療計画業務を行っています。また、治療計画の補助業務および学生教育の一環として、治療計画装置へのCT画像の取り込みと患者体輪郭、肺、脊髄などの比較的簡単な臓器等のROI作成業務を行っています。

研究テーマとしては、主に放射線治療と密接に関わる研究を行っています。現在、大きなテーマとしては、NEDOプロジェクト「基礎研究から臨床研究への橋渡し促進開発／X線マイクロビーム加速器による次世代ミニマムリスク型放射線治療システムの研究開発」にて、新しい動体追跡装置の開発研究を行っています。

また、患者位置セッティングを確認するために撮影する治療ビームを用いたX線透視画像 (LG) と治療計画

で作成した照合用画像 (DRR) の比較を簡便に行うためのソフトウェアを開発しました。本ソフトウェアは、平成19年8月から臨床ルーチンに取り入れられ、初回治療時の位置合わせには必ずこのソフトウェアを利用して位置の確認を行っています。この照合作業は医学物理学部門の業務として行っています。現在、このソフトウェアは医療画像を扱うメーカーを通して、全国の病院で使用していただけるよう調整を行っており、今後も研究成果を業界全体に貢献できるような研究開発をしていきたいと考えています。

その他にも、体内に挿入可能な線量計として、光ファイバとプラスチックシンチレータを組み合わせたSOF線量計 (Scintillator with Optical Fiber Detector) を開発し、Ir-192を用いた高線量率密封小線源治療時の体内線量測定を11例で行うなど、これまでの経験を生かした治療関連機器開発にも着手しています。

教育においては、毎週水曜日の朝に「医工連携研究会」を開催し、病院、医学部保健学科、工学研究科、情報科学研究科の学生および諸先生方から研究の進捗状況を報告してもらい、多方面から研究に対する助言をいただく機会を提供しています。ご興味がありましたら、ぜひ石川までご連絡下さい。

今後も現場のニーズを察知しながら研究テーマを模索し、効果的かつ現実的なソリューションを理論的に解明し、現場へとフィードバックできるように努力したいと考えておりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



石川研究室メンバー

医学部創立90周年記念事業基金募金活動の現況 ー第7報ー

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小 山 司

医学部創立90周年記念事業に向けての募金活動がスタートして1年10カ月が経過しました。募金期限の平成21年3月まで9カ月を残すのみとなりました。

本年6月末現在の募金の納入状況は表のとおりとなっています。全体額は3億4千万円超と、ようやく募金目標額の3分の1に到達したところです。医学部教員はもとより同窓会員の皆様、学生の父母の皆様のご理解とご協力に心よりお礼申し上げます。また、同じく6月末までにご寄附いただいた法人・企業・団体等の名称を掲載させていただいております。ご寄附をいただいた企業等の皆様に厚くお礼申し上げます。

現在、募金活動の対象を医療関係企業及び一般企業・法人にも拡大し、本格的な募金の要請を行っています

が、予想外に苦戦を強いられているのが現状です。日本全体が直面している経済状況、北海道の産業構造等が背景要因としてあることは言うまでもありませんが、この方面でのご理解、ご協力をいただけるよう一層の努力を続けていく所存です。

これら学外関係者の皆様の賛同を得るためにも教員の募金納入率100%の達成は悲願となっています。90周年記念事業のひとつである「医学部会館フラテ」の建設は、平成21年9月に着工予定となっています。一日も早い募金目標額の達成が求められています。表に示すように、現時点での教員の納入率は53.6%です。教員諸兄におかれましては、なお一層のご理解とご協力をお願いする次第です。

寄附金納入状況

(H20. 6. 30 現在)

郵便局 6/30 入金分 北洋銀行 6/30 入金分 法人 6/30 申込まで

寄附金合計				340,470,552 円
◎ 教 員	225 名 /	420 名 (	53.6%)	41,610,000 円
(内訳)				
医学科 教員	108 名 /	147 名 (	73.5%)	24,280,000 円
特任教員	6 名 /	28 名 (	21.4%)	510,000 円
病 院 教授	85 名 /	164 名 (	51.8%)	11,240,000 円
特任准教授	2 名 /	5 名 (	40.0%)	300,000 円
保健学科 教員	24 名 /	76 名 (	31.6%)	5,280,000 円
◎ 分 野	1 件			1,000,000 円
◎ 同門会 (団体)	2 件			2,000,000 円
◎ 同窓生 (教員は除く)	982 名 /	6010 名 (	16.3%)	143,606,667 円
◎ 学生の父母	105 名 /	1434 名 (	7.3%)	11,509,885 円
(内訳) 医学科	81 名 /	598 名 (	13.5%)	9,689,885 円
保健学科	24 名 /	836 名 (	2.9%)	1,820,000 円
◎ 大学院生	1 件			210,000 円
◎ 法人等	190 件			136,434,000 円
◎ 篤志家 (団体・個人 (同門会員を含む))	20 件			4,100,000 円

ご寄附いただいた法人・企業・団体等

1	医療法人 愛全会	71	釧路泌尿器科クリニック
2	医療法人 美しが丘眼科	72	総合病院 伊達赤十字病院
3	医療法人 いしかわクリニック	73	太田医院
4	医療法人 母恋 (旧 医療法人社団 カレスアライアンス)	74	広田医院
5	医療法人 札幌グリーン病院	75	池田暖房工業株式会社
6	医療法人 あすくレディースクリニック	76	エフビー株式会社
7	医療法人 エム・ティール・エヌ 北海道泌尿器科記念病院	77	株式会社アークス
8	医療法人 耕仁会 札幌太田病院	78	株式会社アミノアップ化学
9	医療法人 正観会 御野場病院	79	株式会社大林組 札幌支店
10	医療法人 中江病院	80	株式会社グランビスタ ホテル&リゾート 札幌グランドホテル
11	医療法人 つつみ整形外科クリニック	81	株式会社玄米酵素
12	医療法人 ひまわり会 札幌病院	82	株式会社スクウェア・ワン
13	医療法人 英生会 野幌病院	73	株式会社太陽グループ
14	医療法人 延山会	79	株式会社竹山
15	医療法人 王子総合病院	80	株式会社ツルハホールディングズ
16	医療法人 歓生会 豊岡中央病院	85	株式会社難波薬局
17	医療法人 亀田病院	86	株式会社間組 札幌支店
18	医療法人 啓生会病院	87	株式会社富士メガネ
19	医療法人 恵哲会	88	株式会社北洋銀行
20	医療法人 湊仁会	90	戸田建設株式会社 札幌支店
21	医療法人 研成会	91	日本電気株式会社
22	医療法人 康清会	92	日本メジフィジックス株式会社
23	医療法人 樹恵会 石田病院	93	北海道電気工事株式会社
24	医療法人 彰和会 北海道消化器科病院	94	北海道厚生農業協同組合連合会
25	医療法人 新札幌整形外科病院	95	北海道コカ・コーラボトリング株式会社
26	医療法人 仁楡会	96	北海道バイオシステム株式会社
27	医療法人 清田病院	97	北海道旅客鉄道株式会社
28	医療法人 西病院	98	北海道和光純薬株式会社
29	医療法人 千隆会 岸原病院	99	マルスイ札幌中央水産株式会社
30	医療法人 糖生会 大通り内科クリニック	100	三笠製菓株式会社 札幌支店
31	医療法人 徳洲会 札幌徳洲会病院	101	株式会社エスアールエル
32	医療法人 北海道整形外科記念病院	102	柏楊印刷株式会社
33	医療法人社団 愛心館	103	株式会社ほくやく
34	医療法人社団 石山医院	104	北海道電力株式会社
35	医療法人社団 いずみ会 北星病院	105	新日本製鐵株式会社
36	医療法人社団 いぶり腎泌尿器科クリニック	106	ジーイー横河メディカルシステム株式会社
37	医療法人社団 エス・エスジェイ 札幌整形循環器病院	107	株式会社日本製鋼所
38	医療法人社団 慶愛会 札幌花園病院	108	株式会社メディカルイメージラボ
39	医療法人社団 恵水会 田島クリニック	109	大成建設株式会社
40	医療法人社団 幸和会 くとしん外科胃腸科	110	富士ゼロックス株式会社
41	医療法人社団 五風会 さっぽろ香雪病院	111	トーアエイヨー株式会社
42	医療法人社団 司馬内科クリニック	112	株式会社ミノファergen製菓
43	医療法人社団 新日鐵室蘭総合病院	113	デルモ株式会社
44	医療法人社団 信洋会 石山病院	114	わかもと製菓株式会社
45	医療法人社団 信和会 石川泌尿器科	115	大塚製菓株式会社
46	医療法人社団 苫小牧緑ヶ丘病院	116	沢井製菓株式会社
47	医療法人社団 豊平おおたこどもクリニック	117	株式会社三和化学研究所
48	医療法人社団 健心会 桑園病院	118	帝人ファーマ株式会社
49	医療法人社団 石山内科循環器科クリニック	119	興和株式会社
50	医療法人社団 センチネルクリニック	120	マルホ株式会社
51	医療法人社団 寺島整形外科	121	鳥居薬品株式会社
52	医療法人社団 西谷皮膚科医院	122	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
53	医療法人社団 プリモウイメンズクリニック	123	キッセイ薬品工業株式会社
54	医療法人社団 平成醫塾 苫小牧東病院	124	バイエル薬品株式会社
55	医療法人社団 萌生舎 宮の沢泌尿器科クリニック	125	アルフレッサファーマ株式会社
56	医療法人社団 朋友会 石金病院	126	日本新薬株式会社
57	医療法人社団 北斗	127	エーザイ株式会社
58	医療法人社団 栄仁会 栄通わたなべ内科	128	協和醗酵工業株式会社
59	医療法人社団 友愛会 恵愛病院	129	ブリストル・マイヤーズ株式会社
60	医療法人社団 養生館 苫小牧日翔病院	130	武田薬品工業株式会社
61	医療法人社団 我汝会 えにわ病院	131	萬有製菓株式会社
62	特定医療法人 修道会 本町記念病院	132	ゼリア新薬工業株式会社
63	特定医療法人 仁愛会 浦添総合病院	133	中外製薬株式会社
64	特定医療法人 北楡会	134	財団法人 協済会
65	特別医療法人 明生会	135	学校法人 函館佐藤学園
66	特定医療法人社団 カレスサッポロ	136	第一管区海上保安本部刑事課有志一同
67	特定医療法人社団 千寿会 三愛病院	137	北海道大学医学部精神医学教室同門会
68	特定・特別医療法人 函館渡辺病院	138	北海道大学泌尿器科同門会
69	社会福祉法人 函館厚生院 函館中央病院	139	北海道大学大学院医学研究科腎泌尿器外科学分野
70	総合病院北見赤十字病院		

掲載の許可をいただいた法人・企業等のみ掲載しています。(順不同)

フラテ祭2008開催について

医学部フラテ祭実行委員会事務局

日頃からご支援をいただいております同窓生の皆様を始め、関係者の皆様と医学部との親睦を深めるために開催されるフラテ祭2008につきましては、前号でもお知らせしておりますが、その後にまとまりました内容と各地で開催されております「フラテ会」に贈呈しております「フラテ旗」についてご案内いたします。

日 時：平成20年9月14日（日）13：30～

場 所：北海道大学医学部

第1部 施設・キャンパスツアー 14：00～

（担当 安田和則教授）

●Aコース（医学部施設巡り）

平成16年に竣工した医歯学総合研究棟の実験施設を中心に、最近改築された東北棟・北棟・医学部食堂などの施設をご案内します。

●Bコース（北海道大学病院巡り）

北大病院の外来棟、地下施設（PET、MRI、放射線治療等）、手術室、高度先進医療支援センターなどを中心にご案内します。

●Cコース（キャンパス巡り）

北大構内全体（ポプラ並木、クラーク像、新渡戸稲造像、北キャンパス等）をバスでご案内した後、総合博物館、古河講堂、交流プラザなどにお立ち寄りいただきます。

第2部 講演会（臨床大講堂）15：30～ 17：00

（担当 小山 司教授）

●北海道大学医学部長 本間 研一

「飛翔する北大医学部」

●北海道大学病院長 浅香 正博

「北大病院の新たな挑戦」

●北里大学名誉教授 柿田 章

「外から見た我が母校」

第3部 フラテ交歓会（医学部図書館3階）17：30～

（担当 松下通明教授）

●音羽博次奨学基金授与式

●90周年記念事業基金感謝状贈呈式

●挨拶 北海道大学医学部長 本間 研一

創立90周年記念事業後援会会長 廣重 力

●祝杯 北海道大学医学部同窓会会長 齋藤 和雄

●祝宴（クラシック演奏／医学部DVD上映／北大グッズ抽選会／‘都ぞ弥生’合唱等）

●乾杯 北海道大学病院長 浅香 正博

また、卒業生との連携を深めることを目的とし各地で行われているフラテ会に、昨年12月から本間研究科長が訪問され、「フラテ旗」を贈呈しております。

フラテ旗は、北大キャンパスをイメージする緑の布地に、中央にはフラテのシンボルである星辰徽章を配し、上下に北海道大学医学部と、地区のフラテ会の名称を付した、縦85cm、横120cmの横型旗です。（写真）

「フラテ旗」の贈呈が行われたフラテ会は次のとおりです。

平成19年12月3日（月） 函館フラテ会

平成20年3月27日（木） 東京フラテ会

平成20年5月17日（土） 九州フラテ会

平成20年6月14日（土） 神奈川フラテ会



「フラテ旗」

北大医学部90年史ダイジェスト

北大医学部90年史編集委員会

北大医学部90周年記念事業として、現在「北大医学部90年史」の刊行準備を進めています。そのダイジェスト版（草案）を今号から4回にわたって医学研究科・医学部広報（以下、広報という。）に掲載します。ダイジェスト版掲載の趣旨は、医学部の過去を共有して現在の大学をより良く理解していただくことにあります。本来であれば、2019年に迎える北大医学部創立100周年記念事業としての「北大医学部100年史」の刊行を待つべきかも知れませんが、昨今我が国の高等教育政策は急速に変化しており、大学院重点化や国立大学法人化による部局再編や北大病院の学部からの分離・実質的部局化などもあって、10年後の医学部の組織形態を予測することができない状態にあります。したがって、「90年史」は「100年史」の予習としての意味もありますが、創立以来の組織が維持されているうちに、また、証人や資料が保存されているうちに歴史を記述することに意義があると考えています。

これまで北大医学部の歴史としては、「医学部50周年史」（昭和49年4月刊行）に医学部が創設された大正8年（1919年）から昭和44年（1969年）まで、及び「北大百年史」（部局史）、「北大百二十五年史」（通説編）の部局史に2000年までの記事が掲載されています。なお、平成9年には「北海道大学医学部付属病院創立75周年記念誌」が、また平成12年には「北大医学部同窓会新聞・縮刷版（創刊号～100号）」が刊行されています。しかし、1969年の大学紛争までの医学部史は詳細に記述されているのに対して、それ以後1990年に至るまでの20年間は、記述はほとんどなされていません。従って「90年史」では、1970年から2009年までの40年間、特に前半の20年間について、資料の散逸や証人の記憶が薄れないうちに、記述する予定であります。

広報に連続掲載される予定の「北大医学部90年史」ダイジェスト版は、第1回「大学の苦悩と再生（1969年～1978年）」、第2回「最後の古き良き時代（1979年～1988年）」、第3回「大学改革の嵐（1989年～1998年）」、第4回「新しい医師像を求めて（1999年～2008年）」の順でお送りします。なお、年史は医学部・医学研究科の歴史を記載する「通史」と講座・分野・教室の歴史を記載する「教室史」に分ける予定ですが、ダイジェスト版は「通史」のみとします。

第1回 大学の苦悩と再生（1969年～1978年）

大学紛争

1960年の日米安全保障条約（日米安保条約）改定阻止

運動が一段落した後、いわゆる学生運動は一時下火となった。しかし、医学部ではインターン制度廃止運動や無給医問題から始まった若手医師の抗議行動は、「医局の民主化」や「学位問題」などの問題に発展していった。1969年に発行された学友会雑誌「フラテ」56号に「青年医師の動き―彼らはどう考えるか―」が特集として掲載されている。今これを読むと、当時の青年医師達が如何に真摯に社会に向き合い、自己を主張していったかが判る。一方、当時泥沼化していたベトナム戦争や1970年の日米安保条約改訂などの政治情勢も加わって、1960年代後半から全国の大学を揺るがしたいわゆる「大学紛争」、学生側からは「大学闘争」が各地の大学で勃発した。北大における大学紛争は比較的遅れて1969年4月に始まったが、一部過激な学生グループは「大学解体」を叫んで、北大事務局を始め北大図書館、農学部、教養部、工学部などの校舎を次々と封鎖していった。医学部も封鎖されて、専門教育はすべて中断された。しかし、同年11月に機動隊が導入され、翌昭和46年の春には北大における大学紛争は終焉した。

北大における大学紛争は、政治的課題を別にすれば一般的に争点は希薄であり、紛争の終焉と共に構内は急速に沈静化していった。一方、医学部においては授業が長期にわたって中断されたために学生の出席日数が規定の3分の2に達せず、49期生のほぼ全員が留年となり、卒業が半年延期された。また、大学紛争中に、医学部のクラスがいわゆる非日本共産党系の青年医師連合（青医連）を支持する学生と日本共産党系の民主青年連盟（民青）を支持する学生に分かれて激しく対立し、その後遺症が消えるまでには長い時間が必要であった。さらに、「医局の民主化」や「学位制度」の問題は依然として残っており、大学院入学や博士号取得のボイコットが続いた。当時、学位は「足の裏に付いた米粒」といわれ、「取らなければ落ち着かない」と酷評されたが、医局体制のなかで教授による医局員支配の道具と見なされていたふしもある。

医学部の発展

医学部の基礎系研究室は、創立当時北13条の北大前通りに面した広大な敷地（現在は医学部保健学科研究棟や薬学研究棟が存在する）にあり、臨床系の教室は北大前通りに沿ってさらに北側にあったが、1966年から1968年にかけて新医学部研究棟が附属病院の西側（現在地）に建設されて、医学部の大移動が行われた。しかし、新研究棟建設にあたっては、研究室の面積がこれまでより2

～3割狭くなること、以前あった広いローンや大きな階段式講堂がないことから、新研究棟建設に反対する教授も多かった。また、昭和45年には3階建ての医学部図書館（教職員・同窓生の寄付金約1億円の建設補助があり、当時は記念会館と呼ばれた）が建築され、3階には上品な同窓会室が作られた。

それまで医学部は34の講座・部門（基礎16講座・部門、臨床18講座・部）から構成されていたが、昭和47年に付属癌研究施設・生化学部門（牧田章教授）、昭和48年に循環器内科学講座（安田寿一教授）、昭和50年に薬理学第二講座（菅野盛夫教授）、昭和54年に付属癌研究施設・遺伝子部門（板倉克明教授）と、新しい講座や部門が次々と誕生した。また、昭和47年には医学研究には欠かせない付属動物実験施設が設置され、昭和49年には5階建ての新築動物実験棟が落成し、医学部の内容が一段と充実した。昭和54年6月には、医学部創立60周年記念式典が挙行されている。

医科大学の新設ラッシュ

無医地区の解消を目指した1県1医大の国の政策に沿って、各地で医科大学が新設された。北海道にも1973年、道央の旭川に旭川医科大学が設置された。また、同年北大医学部の入学定員が120名に増員された。その結果、日本全国で新卒医師数は9000人まで増えることになった。当時、大学設置基準で学生10名につき教官1名とされていたため、入学定員増により医学部教官数が若干増えた。また実習室の拡張工事が行われた。しかし1980年代後半になって、厚生省は将来の医師の過剰を懸念し、医師数10%削減の閣議決定に基づき、文部省は各大学医学部の増員した入学定員を元に戻すよう指導した。北大医学部は道庁の要請もあって120名の入学定員を維持しようとしたが、「北大は地方大学ですか」と文部省幹部に説得され、1990年定員を元の100名に戻した。

教育体制

当時、北大入試における募集方式は、文類、理類、水産類、医学進学課程、歯学進学課程（67年より）の3類2課程に分かれており、医学進学課程に入学した学生は2年間の教養教育を経た後、医学部に進学した。文類や理類の学生は教養部での成績により進学する学部が決まったので、大学入学後もそれなりに勉強した。しかし、医学進学課程の学生は進学する学部が決まっていたことや、厳しい受験戦争を勝ち抜いてきた後の気のゆるみもあってか、教養部での勉学には総じて身が入らず、大量の不合格者を出したり、勉学態度の悪さから他学部の教官から苦情が来たりなど、評判は今一であった。しかし、教養教育にも問題がなかったわけではない。優秀な学生にとって、教養教育は高校時代に習った教育の焼

き直しにしか映らなかったのも事実であろう。また、逆に自分の研究成果を得々と語る教官の講義は、一部の学生には興味を与えたかもしれないが、多くの学生には理解の範囲を超えており、無味乾燥と感じられても仕方がない場合もあった。「教養砂漠」という言葉がはやったのもこの頃である。

理類文類の教養生は2年次の2学期から学部に移行し、専門教育を受けていたのに対し、医進課程の学生は3年次から専門科目を学んだ。4月から解剖学、生理学、生化学の講義が12月まで続き、1月からは薬理学、病理学、細菌学の講義が翌年の7月まで行われた。続いて、臨床の系統講義が5年次の前半まで行われ、その後病棟実習（ベッドサイド）、外来実習（ポリクリ）が行われ、6年次の後半は3ヶ月かけて卒業試験が行われた。医学部では専ら知識と理論を教え、診断や治療の実践的臨床医学は卒業後学ぶという医師養成の伝統が北大医学部にも根付いていた。医師国家試験も筆記と面接で、よっぽど不勉強でなければ不合格になることはなかった。医師の質を維持することと試験の公平性を担保するとの名目で、国家試験にマークシート式が導入されたのは1974年のことである。

学生生活

大学紛争直前までは、クラスの団結はむしろ強かったと思われる。定期試験の打ち上げ、進級、大学祭など、何かにかにつけてはクラスコンパ（飲み会）で氣勢をあげ、またフラテ運動会、スキー大会のクラス単位での参加など、同期の絆は高まる一方であった。また、当時の医療を巡る様々な問題は、若手医師だけでなく医学部生の中にも様々な議論を呼び起こし、意見の対立はあったが少なくとも問題意識は共有していた。クラス会議もしばしば開かれ、会議決定は個々の学生の行動をかなり束縛した。しかし、医学部学生にはまだ一致団結して事にあたろうという意識は残されていた。

昭和42年東大医学部から始まった大学紛争以後、北大医学部では学生自治会の主導権を巡って非日共系全学連派（全共闘系）と日共系全学連派（民青系）が争っていた。全医学部生が参加する医学部公認の学生大会が頻繁に開かれるようになり、激しい議論がかわされ、時には教授会とのいわゆる団体交渉（団交）も行われた。この様な雰囲気の中、クラス内でも全共闘系、民青系、ノンポリラジカル（ベトナム平和連合など）、無関心派と分かれていった。しかし、当時の政治情勢、大学情勢は、そこから目を背けることを許さない切迫したものが、程度之差こそあれすべての学生が何らかの形で紛争に関与した。この様ななかで、教員と学生の関係、学生同士の関係、学生と社会一般の人との関係が微妙に変化していったことは、想像に難くない。1969年は北大医

学部50周年の節目の年であったが、前述の事情でお祭りめいた式典は一切行われなかった。

大学紛争が学生側の全面的敗北で終結した後の学園キャンパスは、不思議な雰囲気が漂っていた。教員や先輩の多くは、若気の至りと大目にみて、あるいは焼けぼっくりに火が付くのを恐れて、何事もなかったかの様に振る舞った。放火罪や暴行罪で逮捕、起訴された学生を除き、紛争に参加した学生には何らの処分もなされなかった。嫌な事は早く忘れたいたいという気分が全学にあり、紛争の初期に提起されたまじめな議論も荒廃した学園とともにすべて流れ去ってしまった。

このような雰囲気のなかで、学友会雑誌「フラテ」の果たした役割は評価される。「フラテ茶苑」には同窓生が気ままな文章を投稿して、学生にエールを送った。また「フラテ各地に行く」や「期を訪ねて」も同窓生と現役学生を結ぶ回路の役割を果たし、「医局だより（現・教

室だより）」は、とにかくこ壺的になりがちな教室を医学部に解放した。当時、「フラテ」の顧問をされていた高桑栄松氏（現、北大名誉教授）は、「フラテ精神」の復活を願い「世人を瞬目せしめたここ数年の学園紛争は、大学をその本質において厳しく見つめることを求め、大学人に今や大学は崩壊するのではないかとの危機感すら与えた。師弟関係は断絶し、クラスの友情は砕け散ったかの想いを深めたことは事実であった。このような厳しい現実直面して、われわれにはフラテ精神がある。」（フラテ59号、1972年発刊）と述べた。高桑氏は大学紛争の当時、学部長事務取扱として学生の矢面に立たれ、一部の学生からは激しく非難された経験をもたれる。高桑氏が、北大医学部の統一性を維持するよりどころとして「フラテ精神」を掲げたのは、北大医学部がもはや理屈や理論では解決できない事態に追い込まれていたことを暗に示したのかもしれない。

「医学部保健学科の第一回就職ガイダンスを開催して」

大学院保健科学院 学生委員会委員長 松下通明

医学部保健学科では、2008年3月に第一期生179名を世に送り出したところです。医療技術短期大学部が4年制の大学に改組となって最初の学生が卒業したことになります。医学部保健学科には5専攻があり、それぞれが国家試験受験資格を得ての卒業となります。看護学専攻の学生は卒業後に看護師と保健師さらに一部のものは助産師の国家試験を受けることになります。放射線技術科学専攻では診療放射線技師、検査技術科学専攻では臨床検査技師、理学療法学専攻では理学療法士、作業療法学専攻では作業療法士という具合です。これまでの医療技術短期大学部の頃は、それぞれの専門職として大半の学生が主に医療機関を中心に就職していたわけですが、今年の卒業生からは少々就職先に変化が見られるようになりました。表にありますように就職希望者は121名（69.3%）であり、進学したものが43名（24.0%）と医療技術短期大学部より約15%の増加という結果でした。進学したものが多かった理由として、保健学科が4年制となったこと、また、今年度から大学院保健科学院が設置されたことが上げられます。さらに特記すべきことは、就職先のことです。これまで、医療機関以外の企業に就

職したものの殆どは医療とは比較的密な関連のある企業への就職であったものが、今年度は、報道機関や金融機関という医療職とはかなりかけ離れた企業へ就職する学生が現れたことでした。この傾向が今後も続くものかはさらに経過をみる必要がありますが、学生の就職に対するニーズはこれまでに比べて変化していることが伺えました。

そこで、保健学科では就職ガイダンスを開催して学生のニーズを確認することとしました。北大キャリアセンターの協力を得て、5月14日に第一回の就職ガイダンスを開催致しました。対象は、学部3年生と大学院修士課程1年生と致しました。参加者は約140名と会場となった教室に溢れんばかりの学生が集まり、学生の関心の強さが伺えました。キャリアセンターの担当係長、リクルートの担当者からの就職の現在の状況説明をして頂きました。次回からは学生のニーズに合わせたきめこまやかなガイダンスを行うために学生委員会の中に就職専門委員会を設置して対応して行きたいと考えております。今後とも関連各位のますますのご協力をお願いする次第です。

表 医学部保健学科第一期生の就職動向 (%)

専 攻	国家資格	就職者数	医療機関	官公庁	民間企業	その他
看 護 学	看 護 師 保 健 師 助 産 師	50	46 (92.0)	2 (4.0)	2 (4.0)	0 (0)
放射線技術科学	診療放射線技師	28	25 (89.3)	0 (0)	3 (10.7)	0 (0)
検査技術科学	臨床検査技師	17	11 (64.7)	0 (0)	5 (29.4)	1 (5.9)
理学療法学	理学療法士	17	16 (94.1)	0 (0)	1 (5.9)	0 (0)
作業療法学	作業療法士	9	9 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計		121	107 (88.4)	2 (1.7)	11 (9.1)	1 (0.8)

第47回医学展を終えて

第47回医学展代表兼総務 柴 田 頌 太

6月7日(土)、8日(日)の二日間に渡り、第47回医学展を開催しましたことを報告致します。本年も二日間で3000人を越える方々にご来場頂き、医学展は大変な盛況を博しました。「市民と医学生による検査体験会」、「ドクターヘリ見学」や「講演会」など、各催しについてもご好評の声を多数頂き、市民と医学生の交流の場としての医学展の意義を十二分に果たし得たものと考えております。第47回医学展の具体的な内容については各部門の責任者に譲り、まずは主に実行委員会の運営に関する事柄について述べさせていただきます。

本年は過去の反省を生かし、早期の初動と密な連携による余裕あるスケジュールリングと円滑な運営を、実行委員会の一つの内部目標として掲げて参りました。その施策の一環として、本年の医学展実行委員会のやや特殊な組織形態があったと言えます。第47回医学展実行委員会は「総務」、「市民検」、「救急」、「企画」、「広告」、「広報」、「会計」の7部門から成り、代表及び副代表は共に総務担当者が兼任する形を採りました。基本的に仕事内容については例年と大きな変更点はありませんが、総務の位置付けに変化がありました。本年は総務として例年より多い5名を確保し、どの部門にも属さないマージンワークの処理に加えて、全況把握と他部門のサポートにあたりました。具体的には、5名の総務が各々の担当部門に付いてその進捗状況を把握すると共に、問題発生時には責任者と共に対処にあたるという形でサポート体制を敷きました。作業量の把握・分配に関して認識の甘さが祟り、一部部門の負担過重を招いてしまうことがありましたが、全体的には良く機能したものと考えております。

スタッフ個人の負担と運営上の柔軟性に関して、将来性のあるシステムであると感じました。

また本年は、医学展を主催する医学展実行委員会の運営システムそのものに関する問題が改めて浮き彫りとなった年でもありました。毎年の医学展開催に伴い学生有志により自然発生的に立ち上げと運営が為されるという、医学展実行委員会の極めて特異な形態のため、特に参加者の募集が難航することがありました。過去にも指摘されたことのある難題の一部ではありますが、学生の意識に全面的に依存する本システムの現状との乖離は、今後の医学展実行委員会の運営に際する問題として様々な形で表出してくるものと考えられ、実行委員会の内部改革による対応の限界を超えてしまった際には何らかの形での抜本的な改革が必要になることが予想されます。今後この問題の重要性についての認識が広まり、議論が進められて行くことを期待します。

医学展の抱える課題は上記に留まりませんが、一方で医学展の有する意義は変わらないものと確信しております。学年や部活の枠を越えた学生同士、そして市民の皆様との交流の場として、医学展がその役目を果たし続けることを切に望むと共に、それに向けたあらゆる協力は惜しむものではありません。本年の医学展への参加を通じて、皆様に何か得られたものがあれば幸いです。個人として、実行委員会として至らない点多々ありましたが、第47回医学展を無事成功させることが出来ましたのも、偏に関係各位の皆様方のご理解とご支援の賜物と存じております。この場を借りて、ご支援ご協力頂きました全ての皆様方に厚く御礼申し上げます。

＜企画部門 講演会＞

今年の講演会ではそれぞれ異なる場でご活躍されている三人の医師に御講演頂きました。プログラムは以下の通りです。

・「認知症との付き合い方」

前沢政次 氏 北海道大学大学院医学研究科 医療システム学分野 教授

・「地球のステージ1」

桑山紀彦 氏 NPO法人「地球のステージ」代表理事

・「夕張市における地域医療の試みー超高齢化社会における地域医療」

村上智彦 氏 医療法人財団 夕張希望の杜 理事長
「認知症との付き合い方」では医療システム学分野教授である前沢政次先生をお招きし、認知症の症状や予防法、治療法などについてご講演いただきました。前沢先生の温かな語りは好評を博しました。講演後、直接前沢教授に熱心にお話を伺う方もいらっしや、市民の方々の認知症に対する関心の高さがうかがえました。

「地球のステージ1」では、現在はNPO法人「地球のステージ」の代表理事として、災害時の緊急医療支援や、紛争地や被災地で心に傷を負った人への心のケアを中心として海外支援活動を行っている桑山医師にお越しいただき、世界各地で苦しい思いをしながらもたくましく生きる人々の姿を伝えて頂きました。自身によるライブ音楽と大画面の映像、スライドによる語りが組み合わせられた感動的な公演であり、私たちが世界に対してできることは何かと考えさせられるものでした。

「夕張市における地域医療の試みー超高齢化社会における地域医療」では、現在夕張希望の杜理事長として、夕張の地域医療再生に尽力なさっている村上智彦先生にご講演いただきました。夕張の紹介から、さらに夕張の医療の現状と、予防医学の有効性、地域医療再生への道筋、超高齢化社会における医療のあり方などについてお話ししていただきました。アンケートには多数のご意見・ご感想が寄せられ、市民の方々にとって非常に感慨深いものになったようです。



問題点としては広報活動が行き渡らず来場者が少なかったこと、また会場までの誘導がわかりづらいとのことのお声を頂いたことが挙げられます。来年度の課題としたいと思います。最後になりますが、多くの方々の御協力により今年も講演会を開催することができました。感謝申し上げます。

(文責：講演会責任者 水門由佳)

＜企画部門 学生によるプチ講習会＞

市民検カフェで一服されている方々に、学生が黒板を用いて講習会を催しました。主に検査体験会の各部門の主査が、自らが担当する部門に関連した内容で講義をしました。例を挙げると、「アルコールとのつきあい方」、「「ピロリ菌」について」などがありました。その名の通り時間は短めで約10分間とし、検査体験会の順番待ちをされていた来場者に気軽に聞いていただけたと思います。プチ講習会は市民と学生が会話をする場となり、私たちにとってもこの企画は貴重な経験となりました。

(文責：学生によるプチ講習会責任者 水門由佳)

＜企画部門 障がい者体験＞

今年度の障がい者体験会は例年通り妊婦、車椅子、高齢者体験会を行いました。参加して下さった方々の年齢層は幅広く、小さなお子さんから若いカップル、高校生、高齢者の方…と沢山の方々に参加して頂きました。毎年の事なのですが、子供には車椅子が大人気で半分遊び道具のようになっていましたが、坂道や段差など、車椅子での通行が困難なところで、保護者の方々や我々スタッフが介助、説明すると、彼らなりに車椅子で普段暮さなければならない人たちの苦労を実感していたようでした。

皆さん人によって様々な事を感じられたようで、こちらが予想していた以外の感想が飛び出すことのほうが多く、(当たり前なのですが)驚く事が多くスタッフも沢山の事を勉強させて頂きました。

中でも1番強く印象に残っているのは家族連れで参加なさったお父さんが(当初は子供に車椅子を乗せるだけのつもりだったようですが)妊婦体験をする事になり「これからは奥さんにもっと優しくしないとね」とおっしゃっていた事です。

自分達の活動がバリアフリーの重要性を分かってもらえ、ということだけでなくほんの少しでも誰かの心を暖かくできたということがとても嬉しく、障がい者体験会をやって良かったと思った瞬間でした。

今年はスタッフが10名に満たない危機的な状況で迎えた障がい者体験会でしたが、各スタッフ忙しい中懸命に頑張ってくれたおかげで大盛況で障がい者体験を終える事ができました。この場をお借りして障がい者体験会に

関係して頂いたすべての方に感謝の気持ちを示したいと思います。本当にありがとうございました。

(文責：障がい者体験責任者 河口洋平)



＜企画部門 盲導犬デモンストレーション＞

今年も、北海道盲導犬協会からPR犬のサスケ君と訓練士さんに来ていただきました。サスケ君はまだ3歳のやんちゃ盛りの男の子。その愛らしさや無邪気な表情に惹きつけられた方々がたくさん来てくださいました。訓練士さんのお話を通して、盲導犬の一生や仕事について理解を深めていただけたあとは、アイマスクを使用した体験歩行をしていただくことで、実際盲導犬を使う方々の状況やお気持ちを実感していただけたようです。また、多くの方々が募金活動にもご協力くださいました。私たちスタッフも、サスケ君との出会いを通して多くを学ぶことができました。暑い中でも立派にPRのお仕事をやり遂げてくれたサスケ君、本当にお疲れ様でした！今後、より多くの方々に盲導犬について知っていただけたら嬉しいです。

(文責：盲導犬デモンストレーション責任者 古川タ里香)

＜企画部門 献血＞

企画部門の“献血”は今年度の第47回医学展で5回目を迎えることができました。今年も例年通り、北海道赤十字血液センター様にご協力頂き、6月7日(土)に医学部玄関前ロータリーにて実施いたしました。基本的に昨年度と同様の形式で行い、スタッフとして私含めて2年生4名、1年生3名で活動致しました。私たちの役割は北大祭や榆稜祭を訪れた方々に献血へのご協力を頂けるように声をおかけしていくということです。

献血への呼びかけは非常に難しかったのが印象として残っています。道行く人にいくら「献血して下さい。」と呼びかけをしても、帰ってくるものは何となく冷たい視線であったのが実情です。献血に対する理解のなさが、こういう反応を形成しているのではないかなと思います。現在の日本における血液不足の現状がなかなか理解されていないようです。

(文責：献血責任者 阿部靖矢)

＜救急部門＞

今年の救急部門は、去年と同じく、AEDを用いた心肺蘇生法練習会、三角巾を用いた応急手当、ドクターヘリ見学の3つの企画を行いました。

中でも、心肺蘇生練習会は大変好評で、2日間で延べ150人近くの方々に練習していただくことができました。改めて、市民の方々の心肺蘇生法への関心の高さがうかがえました。気になったことは、練習はせずにAEDの使い方だけ見学したいという方も多くいらっしゃったことです。お話を聞くと心肺蘇生自体の練習はやったことがあってもAEDの使い方はわからないということでした。このことから市民の中でAEDの存在はかなり普及されてはいるが、その使い方までは普及してはいないという事実が浮き彫りになりました。今回の僕たちの企画が市民の方へのAEDの普及の一助となることを願ってやみません。

また、ドクターヘリ見学では、こちらも300人近くの方々が見学に来られて非常に盛況でした。ほとんどヘリに触れるくらいの距離（触ってはいけません）で見学することができて、多くの方の思い出になったと思います。ヘリのキャプテンとの質疑応答では、市民の方が普段なかなか聞けないことを熱心に質問されていて、とても充実した企画として完結することができました。

全体を通して、救急部門は大きな問題もなく大成功だったと思います。これも数少ないスタッフのがんばりのおかげです。本当にありがとう。

最後になりましたが、北大救急部の皆様、卒後臨床研修センターの皆様、手稲溪仁会病院のドクターヘリ関係者の皆様には、お忙しいところご尽力いただき、大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(文責：救急部門責任者 村松憲)

＜市民と医学生による検査体験会＞

検査体験会は、実際の医療現場で行われているさまざまな検査を体験していただくというもので、来場者数・スタッフ数・規模その他どの項目をとっても医学展の他の企画を圧倒するまさに中心企画です。例年多くの方にお越しいただいていますが、リピーターの方も多くいらっしゃいます。

今年は会場を例年通りの場所に戻し、部門も昨年、問診・代謝・エコー・心電図に加え、呼吸器・眼科・アルコールパッチテスト・市民検カフェを新設し、計8部門での大規模な開催となりました。特に数年ぶりに復活したアルコールパッチテストでは、簡単なテストにも関わらず長蛇の列が出来上がり、市民の方々のアルコールへの関心の高さが伺えます。また、各部門主査による市民検カフェでのプチ講演会では、主査たちが自分の担当

する分野についての講演を行い、市民の方々にも好評のようでした。

検査体験会のテーマの一つとして、普段なかなか接触のない市民の方々と医学生のコミュニケーションの場を設けるということがあります。各部門におきまして検査体験をするだけでなく、最近の医学に関することのみならず、いろいろな話を学生と楽しそうになさっている市民の方の姿が見受けられました。例年ご協力いただいているアンケートにも、「良い医者になってください。」という温かい言葉を数多くいただきました。また中には、「現場で待っています。」というものもあり、市民の方々だけではなく先輩医師からの期待を感じるお言葉をいただきました。アンケートの励ましの言葉、ご意見は一つ一つ丁寧に読ませていただきました。

また、各部門のスタッフは企画成功のために日々研鑽を積んできました。その甲斐あってかほとんどの市民の方々から、「説明がわかりやすかった。」との評価をいただきました。この評価をより高めていくことが、これからの市民検の課題だと思います。

この企画は、例年多くの方々の協力を得て成立しています。今年も、検査を行う学生の勉強会・待機医師の派



遣・検査機材の貸し出しなどで、多くの講座のご協力をいただきました。当日、待機医師を務めていただいた第二内科の4名の先生方にもこの場をお借りして再度お礼を申し上げます。皆様方のご協力なしには、今年の市民検を成功させることはできませんでした。本当にありがとうございました。そして、皆様方のご協力なしでは来年の市民検をより良いものにするには叶いません。ご協力よろしくお願いいたします。

(文責：市民と医学生による検査体験会責任者 小川瑞徳)

第2回保健学科祭を終えて

保健学科祭運営委員会委員長 3年 脇

雅

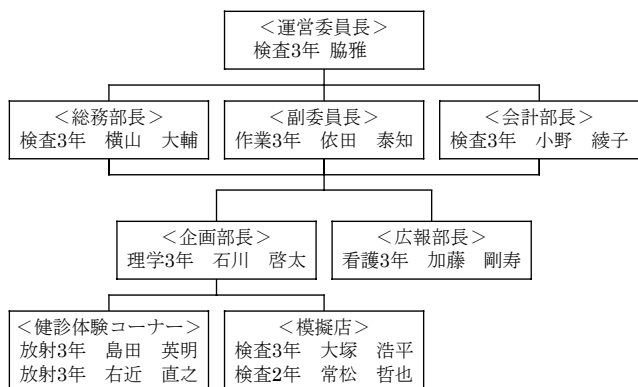
昨年度よりスタートした保健学科祭“NORPL”ですが、Nursing（看護学）、Occupational therapy（作業療法学）、Radiological technology（放射線技術科学）、Physical therapy（理学療法学）、Laboratory medical technology（検査技術科学）これら5つの専攻のフレーズの頭文字を使って全体が一つになれるという祈りも込めてつけられました。

今回で2回目の保健学科祭ということで、去年の企画をどの程度引き継ぐか、また新たにどのような企画を行えばより良い学科祭になるのかを委員で何度も話し合い、企画してきました。今年度よりメタボリック・シンдрーム対策を目的とした『特定健診』がスタートするということで、保健学科の学生だけでなく一般市民の皆さんに『特定健診』について知ってもらい、実際にさまざまな健診を体験してもらうことによって健康への意識を高めてもらうことを目的として、『健診体験コーナー』

をメインの企画として準備してきました。当日は運営委員が中心となって、各専攻の学生にもサポーターとして手伝ってもらいながら運営を行い、6月6日～8日の保健学科祭3日間で約1000人の方々にご来場いただくことができました。多くの方に健診体験コーナー・各専攻による企画を見て体験していただくために行ったスタンプラリーも好評に終わり、皆さんに楽しんでいただけたと思います。

第2回保健学科祭が大成功に終わったのも、忙しい中、準備・運営に携わってくれた運営委員、当日の運営を手伝ってくれたサポーター、模擬店や体験コーナーなどの準備・運営に参加してくれた各専攻の学生、その他の数多くの方々よりご指導いただくことにより保健学科祭を開催することができました。保健学科祭運営委員会、保健学科学生を代表して心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

《保健学科祭運営委員会執行部組織図》



<企画部門>

○健診体験コーナー

健診体験部門は、市民の方々に、実際に医療現場で行われている検査を幾つか体験していただくというものです。本年度は好評につき多くの方に足を運んでいただきました。

今年は、身体、体重、体脂肪測定、血圧測定、肺活量測定、心電図、頸部エコー、骨密度測定などを設置し、その中でも特に骨密度測定は大変な人気で順番待ちの方が長い列を作っていました。

この部門の重要な意義として、普段殆ど接点のない市民の方々と医学部生との間にコミュニケーションの場を設ける、ということがあります。このような交流の場は、私たちにとりましても大変有意義なものであり、今後に活かしてゆけるよう努力してゆきたいと思います。

また、ご協力いただきアンケートにも、多くの励ましの言葉やご意見を頂き、スタッフ一同大変感謝しております。ひとつひとつ、大切に読ませていただきました。

多くの方々の協力を受け、この企画は成立しています。今年も、検査を行う学生の勉強会などで、多くの講座にご協力をいただきました。また、検査機器の貸し出しなどにつきましても、多くの教授方や企業にご協力頂きました。皆様方のご協力なしには、健診体験会部門を成功させることは出来ませんでした。本当にありがとうございました。



ございました。

(企画部 健診体験コーナー担当

放射3年 島田英明、右近直之)

○模擬店

今回は2年生と3年生の一部の有志により、7店舗出店することができました。支援等でこちらの準備不足もあり、参加団体に迷惑と苦労をおかけし、申し訳ありませんでした。

各団体忙しい中、素晴らしいお店を出し保健学科祭を盛り上げてくれたことに、本当に感謝しております。来年の担当者は、支援等についてしっかりと計画を立てて、多くの団体に参加してもらい成功させてください。

(企画部 模擬店担当 検査3年 大塚 浩平、

検査2年 常松哲也)

○各専攻体験コーナー

1. 理学療法学専攻

私達、理学療法学専攻では、体験コーナーで「物理療法というものがあるのか、車椅子生活がどんなものかを実際に体験して知ってもらおう」というテーマの下に「ホットパック・パラフィン浴体験」と「車椅子体験」を企画し、開催しました。

企画当初は、本当にこれで大丈夫なのだろうかという先の見えない不安でいっぱいでした。しかし、実際に体験者の方から、「物理療法って始めて体験しました。気持ちよかったです。」「こんな療法もあるって知りませんでした。」という言葉や「車椅子で道を走ることってすごく大変ですね。初めての体験でした。」等の多くの言葉を言って頂きました。3日間を通して、一つの事故もなく、大勢の人に体験してもらうことが出来て、安堵するとともに、企画して本当に良かったと思いました。

今回の企画で、理学療法士がどういうことを行っているのかという事、車椅子での移動がどのくらい大変かという事を少しでも知ってもらう良い機会となり、さらに体験者の人にも喜んでもらうことができて本当に良かったと思います。

最後に、体験コーナー開催にあたり、機器の使用や準備等の多くの事に力を貸してくださった先生方、委員の皆様にご感謝します。ありがとうございました。

(理学療法学専攻 3年 萬井太規)

2. 作業療法学専攻 アロマ石鹸作りコーナー

作業療法の中で用いられる創作活動の中から、アロマ石鹸作りを来場者の方に体験していただきました。アロマ石鹸作りという『作業』をしながら作業療法についての紹介などを行い、少しでも作業療法というものがどのようなものか知ってもらえたらと思い、今回このような企画を行いました。

小さい子供からおじいちゃんおばあちゃんまで幅広い年齢層の方々が参加してくださり、どなたも石鹸作りをととても楽しんでいる様子でした。最後は用意していた材料がすべてなくなってしまい、参加できない人達がどのほどの大盛況に終わりました。来年以降も保健学科祭に来てくれた皆さんに楽しんでもらい、かつ作業療法に興味を持ってもらえるような企画を考えていきたいと思っています。

○すみれ会バザー

今年初めての企画として「地域活動支援センターすみれ第二作業所」の方々によるバザーを開催しました。ここで簡単にこのすみれ作業所がどんなところかというのを紹介したいと思います。すみれ作業所は精神障がいがかかえる人たちの当事者団体「すみれ会」の運営する作業所で、スタッフ業務も精神障がいを持つ者が行っています。メンバーは、来たい時に来て帰りたい時に帰るというのをモットーに、自由に作業やサークル活動を行い、作業の場、憩いの場、集いの場として、作業所を利用しています。こちらで行っている作業は、すみれ会の機関誌の製本やミシンによる洋裁などです。作っているものはエプロンやポーチやバックなどの小物のほか、アクリルのたわしなどです。今回はこのミシンサークルのメンバーの皆さんにお越しいただき、手作りの小物や布製品を販売しました。

準備の段階でいろいろとバタバタしてしまいましたが、バザーは盛況でメンバーの皆さんには「楽しかった。またぜひ来年も呼んでください。」と言っていました。これが何よりもうれしかった事です。この場を借りてすみれ作業所の皆さん、協力していただいた先生、またスタッフの皆さんにお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

来年もぜひすみれ会バザーにお越しください♪♪♪

(企画部 すみれ会バザー担当 作業3年 依田泰知)

○ユニセフ募金

ユニセフ募金は去年に引き続き2回目の企画となりました。今年度は去年と同様、保健学科前のイチョウ並木沿いに模擬店と並んでテントを設置し、ジュース販売を行い、その利益分を全て募金としたり、募金していただいた方にお菓子を配ったりしました。このほか、保健学科内でユニセフ北海道支部からお借りしたパネルや資料を用いて、パネル展を新たに企画しました。学科祭期間中は、多くの方がユニセフ募金に関心を持っていただき、募金していただいたり、署名活動にも興味を示していただき日々盛り上がりを見せました。結果として、今年度も多くの方々に募金していただき、たくさんの寄付金をユニセフにお渡しすることができました。来年度以降も後輩の学科祭委員の方々には、ユニセフ募金をよりよい企画にしていきたいと思います。今回の募金活動に協力してくださった学科祭委員やサポーターのみなさん、保健学科前で来場者の方に積極的に声をかけ保健学科祭を盛り上げてくださった保健学科の学生のみなさん、そして保健学科祭に足を運んでいただき、募金をしてくださった来客の方々皆さんにこの場をお借りして感謝のお礼を申し上げます。

(企画部 ユニセフ募金担当 理学3年 石川啓太)

<広報部門>

今年はまだまだ第2回目ということもあって、保健学科祭はほとんど知られていないのが実情です。

広報では、多くの人へ保健学科祭というものをやるよ!! やるんだよ!! というアピール、周知徹底が一番の目的です。せっかく、私たちが作り上げた企画やお祭りを多くの人に見てもらい、体験してもらわなければ!! という思いで、いかにすれば、たくさんの人が訪れてくれるかを考え、実践しました。お店の開店記念でよく使われているアドバルーンを使うことや、新聞折り込み、いろいろなお店にポスターを! などできた取り組みとできなかったことがあります。楽しくいろいろ考えました。なかでも、好評だったのが模擬店8店舗100円分無料クーポンをメインストリートでの配布です!! 赤ジャンを着て、拡声器で声を張り上げて「学祭はメインストリートではありません。実は保健学科祭もやってます」こちらのメインストリートを曲がっていただいたイチョウ並木一番奥北13条門付近、保健学科にて保健学科祭やってます! お帰りの際は地下鉄北12条も近いです。」とせいいっぱい呼び込みを行いました。そのおかげもあってか、去年200人未満(推定)が3日間で1000人越えを果たし、やった甲斐がありました。保健学科がにぎやかになるぐらいたくさん来てくれ、楽しかったです。

P. S. メンストだけでなく、イチョウ並木も見に来てね^^;

(広報部長 看護3年 加藤剛寿)

<会計部門>

会計の仕事としては、保健学科祭全体の収入・支出を管理するのが主な仕事でした。今年の保健学科祭は第2回ということもあり、会計のデータが1年分しかなく、毎年恒例のイベントも定まっていなかったため、予算を組むのが大変でした。物品購入など支出の額をこまめにチェックして把握していたので会計においての大きな額

の狂いはありませんでした。去年の支出のデータから、できるだけ不必要と考えられる出費を除き、各部門の企画内容を考慮した上で予算を組みましたが、結局予算が余るという事態になってしまったので、来年は具体的な計画を早めに決定し、しっかり見通しを立てた上で予算を組むといいと思います。

(会計部長 検査3年 小野綾子)

お知らせ

◆ 北研究棟竣工披露及び祝賀会を開催して ◆

平成20年3月31日に医学研究科北研究棟改修工事が完了したことに伴い、4月2日(水)に竣工披露及び祝賀会が開催されました。まず始めに、完成したばかりの研究棟1階及び2階を見学し、その後、医学部食堂において祝賀会が開催されました。祝賀会では、本間医学研究

科長からの挨拶に続き、嶋貫理事・事務局長から祝辞があった後、増川施設部長の発声により祝宴が始まり、小林保健科学研究院長の乾杯で盛会のうちに終了しました。

◆ 平成20年度各種助成の採択状況 ◆

(単位：円)

財団法人等	種 別	研 究 者 名	交 付 金
財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会	研究助成金	清 水 宏	2,000,000
財団法人喫煙科学研究財団	平成20年度研究助成	三 輪 聡 一	4,000,000
		秋 田 弘 俊	2,000,000
		吉 岡 充 弘	2,000,000
		別 役 智 子	5,000,000
		玉 木 長 良	2,000,000
財団法人武田科学振興財団	一般研究奨励	大 場 雄 介	2,000,000
財団法人秋山記念生命科学振興財団	一般助成	築 山 忠 維	1,000,000
		大 場 雄 介	1,000,000
		岩 永 敏 彦	1,000,000
		松 本 美佐子	1,000,000
	奨励助成	絹 川 真太郎	500,000
		西 嶋 剣 一	500,000
		堀之内 孝 広	500,000
財団法人伊藤医薬学術交流財団	交流助成	廣 谷 真	200,000
		小 西 香 苗	200,000
	招聘助成	岸 玲 子	300,000
	学会等助成	本 間 さ と	300,000
財団法人北海道高齢者問題研協会	平成20年度研究事業	前 沢 政 次	600,000
財団法人日本ワックスマン財団	平成20年度学術奨励研究助成	伊 敏	1,000,000
財団法人杉野目記念会	学会等助成	本 間 さ と	50,000

平成20年6月30日までの採択判明分

◆ 平成20年度科学研究費補助金採択状況 ◆

(単位：千円)

研究種目	新規申請	継続	平成20年度	
	件数	件数	件数	交付金額
特別推進研究	0	0	0	0
特定領域研究	29	5	10	78,200
基盤研究(S)	3	1	1	23,400
基盤研究(A)	5	3	6	116,610
基盤研究(B)	25	16	23	153,920
基盤研究(C)	35	21	40	79,560
萌芽研究	41	6	14	26,500
若手研究(S)	2	0	0	0
若手研究(A)	3	1	4	35,880
若手研究(B)	17	6	13	26,650
合計	160	59	110	540,720

※採択率(新規・継続を含む) $110 \div 219 = 50.2\%$

※平成20年7月1日現在

広報室便り 6

広報室員が楽しい気持ちになる仕事の1つに、医学研究科のホームページで各研究者が学会賞を受賞されていることを「最新のお知らせ」に載せることがあります。その数が増えており、うれしい限りです。英語版の完成を目指して鈴木室員がすばらしい入力フォーマットを作ってくれて各分野に内容の記載をお願いしているところですが、これの完成も楽しみです。広報室の新たな仕事として「概要」(日本語版と英語版)や大学院生向けのパンフレット作成をするために、編集経験が豊富な新メンバー斎藤文子さんが加わりました。静かですが明るいキャラクターで紙面を舞台とした今後の活躍が楽しみです。(白土博樹)

編集後記

北海道の短い夏がやって参りました。夏季休暇を確実に取得するようにお達しが来るなど、時代も様変わりしたようです。そんな中、広報が年4回となり2年目を向かえ、順調に号数を重ねことができました。今号より、シリーズ「北大医学部90年史のダイジェスト」の掲載が開始されるなど、新しい試みもあります。カラー化も定着し、なるべく皆さんに役立ち、有意義な情報を発信したいと思います。今後とも皆さんのご協力を宜しくお願いいたします。(近江谷克裕)

Home Pageのご案内

医学研究科／医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

kouhou-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科・医学部広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学系事務部総務課庶務担当
電話 011-706-5892
編集委員 近江谷克裕、山本 有平、田中 真樹
佐藤 松治、平塚 志保、山内 太郎